

IBM Impact Grants 社会貢献プログラム 「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」

2014年6月18日 NPO法人 ETIC.(エティック)様



「IBMインパクト・グランツ(IBM Impact Grants)」は、IBMの持つテクノロジーやノウハウ、社員のスキルを活用したソリューションを“寄付”することで、社会課題の解決に取り組む非営利団体(NPO)の活動を支援する社会貢献プログラムで、全世界のIBMで提供しています。

日本では、そのメニューの一つである「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」を、2013年12月より提供開始し、2014年6月にはNPO法人 ETIC.(エティック)様向けに実施しました。

NPOの業界においても高まる プロジェクトマネジメントの必要性

ビジネスの世界だけでなく、成長を続けるNPOの業界にとってもプロジェクトマネジメントの必要性が高まっています。

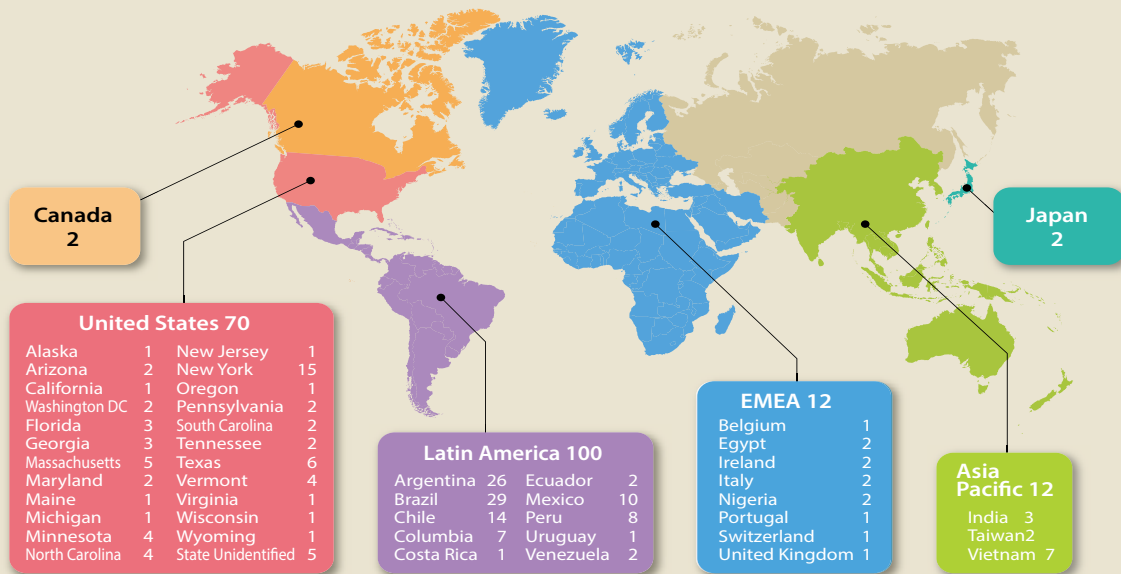
NPO法人をはじめとする非営利団体は、社会インパクトの実現と拡大という役割を担っています。社会インパクトは、ソーシャル・インパクトとも呼ばれ、事業実施の結果起こった社会に対する直接的・間接的効果や変化のことを指します。NPOの業界においては、その社会インパクトの拡大の方法として「スケールアップ」と「スケールアウト」という概念があります。これらは、もともとITの世界の言葉で、サーバーの処理能力の拡大のために、サーバー単体の処理能力を増強していくことをスケールアップ、サーバーの台数を増やして並列化し全体として処理能力を増強していくことをスケールアウトと

IBMインパクト・グランツ「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」とは

NPOの役割や課題は社会のニーズにより変化しており、近年は、より複雑化する社会課題への戦略的な取り組みや、組織運営の効率化、IT活用による業務の高度化などが課題になっています。IBM Impact Grants(IBMインパクト・グランツ)は、2010年に北米で開始され、現在はグローバルで展開する社会貢献のプログラムです。提供される支援のラインナップや内容は、従来IBM自身が活用したりお客様にビジネスとして提供しているソリューションを、NPOからのフィードバックや要望を基に当プログラム向けに監修したもので、すべてIBMのスペシャリストにより提供されます。

その一つである「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」は、これまでに、北米、南米を中心として、全世界で約200回の開催実績があります。日本では2013年12月にパイロットを実施し、2014年度より本格的に展開を開始しました。

●お問い合わせ先：日本IBM社会貢献 ccrjp@jp.ibm.com



呼んでいましたが、NPOの世界にも転用され使われています。

社会インパクトの拡大を目指すためのNPOにとっての「スケールアップ」アプローチとは、一つのプロジェクトの規模を拡大していくことを意味し、その結果プロジェクトは複雑になり不確実性も増えていきます。一方「スケールアウト」アプローチは、組織として同時実行するプロジェクトを増やすことを意味し、その結果、プロジェクトごとに成果や成否のばらつきがでないように管理する必要がでてきます。つまり、どちらの状況においてもプロジェクトマネジメントの必要性が高まってきます。

こうしたNPOが社会インパクトの拡大を目指す上で必要となるプロジェクトマネジメントのニーズに対応するために、IBMが社会貢献活動として提供しているのがIBMインパクト・グランツ「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」です。

IBMの現役プロジェクト・マネジャーがプロジェクトマネジメントの知識体系を解説

「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」は、“社員のスキルを社会に生かす”というIBMの社会貢献の考え方の下、現役プロジェクト・マネジャーが講師やアドバイザーとなってNPOに対してプロジェクトマネジメントの講義とアドバイスを行う1日の研修プログラムです。NPOに対して寄付として無償で提供されます。

このワークショップの講師は、普段、実務としてプロジェクトの現場で実践と切磋琢磨を行っているIBMの現役のプロジェクト・マネジャーが担当します。また、ワークショップ内で実施するグループ作業でも、同じく現役のプロジェクト・マネジャーが各グループに一人ずつついて、直接NPOのメンバーに対して知識と経験を基にアドバイスします。IBMの現役のプロジェクト・マネジャーが講師やアドバイザーを担当するというのが、

図1. PMワークショップのカリキュラム内容

•プロジェクトマネジメントの概要	
•プロジェクトの立上げ	プロジェクト憲章作成
•プロジェクトの計画	マスター・スケジュール作成 作業計画(WBS)作成 要員計画作成 ステークホルダー・マネジメント
•プロジェクトの実行	作業の指揮・マネジメント チーム編成・チーム育成
•プロジェクトの監視・コントロール	作業の監視・コントロール 課題管理 変更管理 リスク管理
•プロジェクトの終結	プロジェクトの終結

WBS : Work Breakdown Structure

このワークショップの大きな特徴です。

また、このワークショップは、参加者が実際にこれから実行しようとしている実プロジェクトを具体的なケースとして取り上げるという点にもう一つの特徴があります。仮想やサンプルのプロジェクトを用いるのではなく、NPOが実際に実施している自分たちのプロジェクトを取り上げて、そのプロジェクトにプロジェクトマネジメント手法を適用することを体験します。参加者が実際の自分が携わっているプロジェクトで考えることにより、より身近で具体的な気付きと学びを導き出します。

「NPOの参加者が実プロジェクトを取り上げてプロジェクトマネジメントの手法を検討する」「IBMの現役のプロジェクト・マネジャーが支援する」という2つの特徴により、1日7時間という短い時間の中で、参加者のプロジェクトマネジメント能力獲得という成果の最大化を図っています。

NPO法人 ETIC.様にワークショップを提供 実プロジェクトを用いた実践演習

2014年6月18日、IBM本社事業所にて、NPO法人 ETIC.様に対して、「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」を提供しました。ETIC.様は、1993年に活動を開始した、起業家型リーダーの育成や社会のイノベーションに貢献する人材育成を目指すNPO法人です。今回のワークショップでは、職員・インターンの方を含めて26名の方に参加いただきました。

IBMからは、筆者を含む2名が講師を、5名がグループごとのアドバイザーを担当しました。全員、NPOに対するプロジェクトマネジメントのノウハウ提供という社会貢献活動に自ら参加を希望した、現役のプロジェクト・マネジャーです。

冒頭、ETIC. 事務局長の鈴木敦子様から、「ETIC.は今年創立20周年を迎え、規模の拡大に伴って仕事の仕方も変えていかなければならないと考えていたところに今回のお話をいただき、タイミングが良かったと感じています。組織の変革を推進する際に、内発と外圧を上手く利用することを試みていますが、今回は『外圧』としてこのワークショップを活用し、さらに良い方向に進めていければと思っています」と今回のワークショップの意義についてお話をいただきました。

ワークショップは、IBMのプロジェクトマネジメント手法から、NPO向けに特に必要と考えられる部分を抽出した内容になっています(図1)。カリキュラムの各テーマについて講師から講義を受けたのち、グループ作業を実施します。グループ作業ではIBMが用意したプロジェ



クトマネジメントの記入シートを使って、自分のプロジェクトの情報を基に、グループで相談しながら記入シートに書き込みまとめていきます。例えばスケジュール作成の部分では、スケジュール作成の考え方の講義を聞いた後、実際に自分のプロジェクトについてのスケジュール・チャートを作成します。そしてグループ作業の際には、テーブルごとにそれぞれ1名のIBMアドバイザーが付き、質問に答えたりアドバイスをを行いながら進めていきます。

午前中スケジュール作成や作業計画作成を学んだ後、午後はステークホルダー・マネジメントやリスク・マネジメントについて記入シートに書き込みながら作業を続けます。最後に今回のワークショップの成果を今後どう生かせるかを検討して、ワークショップを終了しました。

ワークショップを終えた参加者からは、「プロジェクトマネジメントはただのスケジュール管理ではないということに気が付いた」「現在進行形のプロジェクトを用いた演習によるリアルな課題共有が効果的だった」「各グループに一人IBMのアドバイザーがついていたので質問がしやすかった」「組織の人間がまとまって話し合うことによって共通言語化が進んだ」といった感想をいただきました。

国内のNPOに向けて、 年間3～5回のワークショップを予定

IBMインパクト・グランツ「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」は、国内のNPOに向けて年間3～5回の提供を予定しています。IBMでは、現役プロジェクト・マネジャーがそのスキルを社会貢献に生かしたいという意欲が高く、既に50名を超えるプロジェクト・マネジャーが講師として登録しています。IBMは、引き続き「プロジェクトマネジメント・ワークショップ」を提供していくことによって、NPO業界におけるプロジェクトマネジメントの普及に貢献してまいります。



日本アイ・ビー・エム株式会社
グローバル・ビジネス・サービス事業
クロス・インダストリー・アプリケーション開発
インベティブソリューション
アドバイザー・プロジェクト・マネジャー

大津 真一
Shinichi Otsu

1993年入社。プロジェクト・マネジャーとして主に通信メディア業界のお客様のシステム構築プロジェクトに参加。また、社会貢献部門と連携しNPO業界へのプロジェクトマネジメントの普及を推進している。

Interview・参加者の声



**「多様なメンバーが共有する
“共通言語”を獲得できました」**

NPO法人ETIC.
インキュベーション事業部
マネージャー

佐々木 健介 氏

ETICは、それぞれバックボーンの異なるメンバーの集まりで、元コンサルタントもいれば現役の学生もいます。そうした中で、今回のワークショップで良かった点の一つは、多様なメンバーが共有する「共通言語」を獲得できたことです。スタッフがそれぞれ強い思いを持ち自律的に活動していることは良いカルチャーなのですが、コストや時間に対する認識に差が生じたり、仕事が個人のスキルや馬力に依存している部分もあります。今後さらに活動を広げていこうとするときに、外部の新しい人材を巻き込みやすい環境づくりとして、今回学んだフレームワークと可視化の手法は非常に役に立つと感じています。

また、私たちが今まさに取り組んでいるプロジェクトを題材にワークショップが進められ、同時に現役のプロジェクト・マネジャーの方と現場の知恵を共有できたことで、非常に学びの深い有意義な場となりました。今後もぜひフォローアップを含めてご協力をお願いしたいと思っています。



**「今回学んだことは、
今後のプロジェクト管理すべてに
役立ちます」**

NPO法人ETIC.
コミュニティ展開事業部
コーディネーター

川口 枝里子 氏

首都圏の大学生が地域でインターンをするプロジェクトを担当しています。ワークショップでは実際のプロジェクトを題材に客観的なアドバイスを受け、明日から活用できそうでとてもありがたかったです。同じ組織内で考え方が一方向になりがちな中で、違う考え方をいくつか提示され、新たな気づきを得ることができました。ETIC内でも同様のアドバイスを受けることは可能かもしれませんが、プロジェクトマネジメントの意義を考えながら助言を得られる機会は貴重な体験でした。

今回学んだことは、今後のプロジェクト管理すべてに役立ちます。人件費や要員管理の考え方や、ステークホルダーをマッピングしてそれぞれの対応策を検討することなど、実務に応用が利きそうです。また、今回教わったような考え方をIBMが実際に使い全世界で共有しているという話を聞き、非常に刺激を受けました。本当にありがとうございました。